



写真提供:関東ラグビー協会

1月に行われたラグビー大学選手権ファイナルステージで筑波大学は、帝京大学に敗れたものの国立大学初となる準優勝に輝いた。史上初の偉業を成し遂げた筑波大には、世間の多くの人々が声援を送っていた。

準決勝

年内におこなわれた大学選手権ファーストステージを全勝で通過し、むかえた1月2日のファイナルステージ準決勝東海大学戦。昨年度の大学選手権では、筑波は帝京大学に、東海は筑波に敗れていた。そのため両チームとも、今年こそはトリベンジに燃えていた。筑波の試合の前には準決勝のもう1試合が行われ、4連覇を狙う帝京が早稲田大学を破り、決勝進出を決めていた。

前半、風上に陣取った東海のボールは風に乗り、筑波の自陣深くまで運ばれる。接点でも東海の重いFWに苦しまれ、攻めきれない。前半終了ところで5・21と差がついた。

後半、今度は筑波が有利な風上にまわり、試合が再開された。しかし、ハンドリ



準決勝東海大戦に勝利し喜び合う選手たち



日本一へあと一歩

ドラマが始まった。トライ後のキックオフ。SO片桐康策選手(体育3年、長野・飯田高)が風に乗せて、敵陣深くまで運んだ。東海の選手がそのボールを蹴り返した瞬間、途中出場の藤田幸一郎選手(3年、宮崎北高)が走り込んで伸ばした腕がボールに当たった。フォロウに入った柏谷俊輔選手(体育3年、埼玉・浦和高)が左隅に押し込み、このトライで26。再逆転に成功した。この逆転劇に観客席はお祭り騒ぎ。筑波コールが巻き起こった。このままノーサイドのホーンを迎え、この瞬間筑波が史上初の決勝進出を決めた。

決勝

劇的な逆転劇を飾った準決勝から約10日後。宿敵帝京との決勝の日を迎えた。王者帝京との一戦を見ようとたくさんの観客が国立競技場に詰めかけた。ラグビー部でもバスツアーを企画し、多くの学生がつくばから駆けつけた。帝京ファンの赤い集団に匹敵する程のフューチャブルーのフラッグを振る集団がスタンドを埋めていた。「帝京に勝つために準備してきた」と内田啓太主将(体育4年、日川高)が語る、1年間の成果を発揮する時がいよいよ来た。

試合開始直後から、両チームのハンドリングエラーが多くなり、スクラムの組み合いが多くなる。するとやはり帝京FWが力を発揮してくる。12月の試合では、ハンドリングエラーを減らしてFWとの直接対決を避けたことが勝因だった。内田主将は「12月の試合の直前に(帝京と同じタイプの明治大学に負けた反省を活かすことができた」と語り、今回も同様の戦いができるかどうかが鍵となっていた。

筑波には観客を沸かせる両ウイングがいる。一人はWTB福岡堅樹選手(情報1年、福岡高)だ。機関車のような走りっぷりでタクルされても倒れない。強烈な縦への突破力が持ち味の選手だ。もう一

人は逆サイドのWTB彦坂匡克選手(体育4年、愛知・春日丘高)だ。華麗なステップで相手をかわし、相手ディフェンスの合間を縫うように突破していく。このタイプの違う2人にボールが渡ると、スタンドは大いに盛り上がる。34分、その福岡選手にボールが渡る。持ち前のスピードで相手ディフェンスを突破し、この試合初のトライを決める。しかし前半は、なかなか攻めきれず、トライはこの一本に終わり、10・22

人は逆サイドのWTB彦坂匡克選手(体育4年、愛知・春日丘高)だ。華麗なステップで相手をかわし、相手ディフェンスの合間を縫うように突破していく。このタイプの違う2人にボールが渡ると、スタンドは大いに盛り上がる。34分、その福岡選手にボールが渡る。持ち前のスピードで相手ディフェンスを突破し、この試合初のトライを決める。しかし前半は、なかなか攻めきれず、トライはこの一本に終わり、10・22

「来年こそ帝京に勝って優勝したい」

筑波スポーツ

平成25年3月6日(水)
第152号

題字:中山雅史氏
(元サッカー日本代表・蹴球部OB)

で前半を折り返した。後半、筑波は帝京の圧力を受けながらも、得意なタリオンバー(接点でボールを相手から奪う)を多用し、攻撃の糸口をつかみ始める。しかし、一度の接点に人数がかかりすぎてしまい、どうしても逆サイドにスペースができず、その隙を、帝京は逃すことなく突いてくる。最大の見せ場は34分、ラインアウトからのボールをFWが押し込み前進、横へ展開し彦坂匡克選手がトライを決めた。手に汗握るラックの攻防から横への展開は筑波の得意とする形だ。試合最終盤の38分、SH内田啓介選手(体育3年、京都・伏見工高)



(大庭夏海)



緊迫した試合展開だった準決勝東海大戦

陸上競技部



アジア・ジュニア選手権 5000m 2位

九馬 萌



日本学生陸上競技個人選手権大会 三段跳 1位

大坂 阿玖里



日本学生陸上競技個人選手権大会 やり投げ 1位

木村 圭



2012日本学生陸上競技個人選手権大会 100m 1位

立山 紀恵



第81回全日本学生陸上競技対校選手権大会 三段跳 1位

松下 翔一



第81回全日本学生陸上競技対校選手権大会 1000m 1位
アジア・ジュニア選手権 5000m 1位

九馬 悠



第28回日本ジュニア選手権大会 走高跳 1位

平 龍彦



第81回全日本学生陸上競技対校選手権大会 棒高跳 1位

仲田 愛



日本学生陸上競技個人選手権大会 110m 1位

大室 秀樹



2012日本学生陸上競技個人選手権大会 円盤投 1位
アジア・ジュニア選手権 円盤投 1位

高橋 亜弓



第81回全日本学生陸上競技対校選手権大会 800m 1位
第67回国民体育大会 成年女子800m 優勝

真下 まなみ



2012日本学生陸上競技個人選手権大会 100mH 1位

相馬 絵里子



2012日本学生陸上競技個人選手権大会 走高跳 1位

戸邊 直人

体育会賞 団体の部



第81回全日本学生陸上競技対校選手権大会 女子総合 1位

陸上競技部



アジアジュニア女子バレーボール選手権大会 3位

本間 真樹子

女子バレーボール部



第24回フィンスイミング日本選手権大会
男子100mCMASビーフィン 1位

門間 貴史



第24回フィンスイミング日本選手権大会 女子1500mサーフィス 1位
女子800mサーフィス 1位・女子400mサーフィス 1位
第13回フィンスイミングアジア選手権 女子1500mサーフィス 2位

山岡 明奈

医学水泳部



JKA European championship
個人型 1位・個人組手 1位・団体組手 1位

Roisin Campbell

医学空手道部

体育会賞
まだまだ!



今年活躍
大賞
体育会賞
受賞者一覧

女子バスケットボール部



第21回FIBA ASIA U-18女子
バスケットボール選手権大会 2位
藤岡 麻菜美



第21回FIBA ASIA U-18女子
バスケットボール選手権大会 2位
早坂 彰恵

水泳部



第67回国民体育大会
女子成年400メートルリレー 優勝
諸貫 瑛美



ロンドン2012パラリンピック競技大会
男子50m自由形 4位
男子100m自由形 6位
山田 拓朗



2012年全国学生ラート競技選手権大会 優勝

堀口文、前原千佳、吉行暢子、安高啓貴



第17回全日本ラート競技選手権大会 跳躍・直転 優勝
全日本学生ラート競技選手権大会 女子直転・跳躍・斜転・総合 優勝

堀口 文



2012年全国学生ラート競技選手権大会
男子斜転・総合 優勝

安高 啓貴

体操部



グランドスラム・東京 78kg級 優勝
ワールドマスターズ・アルマティ 78kg級 3位
グランドスラム・パリ 78kg級 3位
全日本選抜柔道体重別選手権大会 78kg級 優勝
東京グランドスラム2012 78kg級 2位
緒方 亜香里



東京グランドスラム2012 66kg級 優勝

森下 純平



ロシアジュニア国際大会 90kg級 3位

長倉 友樹



グランプリ・デュッセルドルフ 48kg級 2位

遠藤 宏美



アジアジュニア・ユース世界選手権 90kg級 優勝

小林 悠輔



グランドスラム・モスクワ 73kg級 優勝
東京グランドスラム2012 73kg級 3位

西山 雄希



ドイツジュニア国際大会 81kg級 優勝
全日本ジュニア体重別選手権大会 81kg級 優勝

永瀬 貴規



全日本学生柔道体重別選手権大会 68kg級 優勝
グランプリ・バグー 68kg級 優勝
グランプリ・アブダビ 68kg級 3位

小寺 将史



ワールドカップ・ブラハ 90kg級 優勝
ワールドマスターズ・アルマティ 66kg級 3位
グランプリ・デュッセルドルフ 66kg級 3位

西山 大希

第36・37代

体育会執行委員長挨拶

新

第三七代執行委員長

綿谷桂太

こんにちは。体育会第37代執行委員会委員長、体育専門学群3年の綿谷桂太です。現在、体育会は部会45団体、同好会11団体と医学支部で構成されており、構成員は3000人に上ります。今年は「体育会の本質を高める」ということを目標に掲げました。昨年の反省も踏まえ、これまでの仕事を見直し、仕事をスリム化しました。ひとつひとつの業務の質をあげることで、団体により信頼される組織となれるよう活動していきます。昨年度は男子バレーボール部のインカレ優勝や全国大学女子駅伝3位の活躍、また今年度はラグビー部のインカレ準優勝など体育会所属団体の活躍から目が離せません。団体がさらに円滑な活動ができるように、これからも尽力してまいりますので、体育会をどうぞよろしくお願い致します。

第36代体育会執行委員会は「執行部内での理解を深め、体育会全体に発信し、相互理解を深める」という目標を立て、1年間活動をして参りました。規約の読み合わせや問題点の洗い出しから始め、発信の場としては入学式や新入生オリエンテーションなどの機会を利用し、体育会についての説明を行いました。今年達成できたことは小さなことであつたかもしれませんが、続けていくことに意味があると考えております。

部会のみならず同好会や医学支部が共存しているこの組織が、他の大学にはない素晴らしいものとなるためには、更に成長しその活動を外に発信していくことが大切だと感じております。今後とも筑波大学体育会をよろしくお願いいたします。

旧

第三六代執行委員長

深山大生

卒業生特集

一面でも紹介したラグビー部から、今年度卒業する選手を紹介する。彦坂匡克選手、圭克選手ともに体育4年、愛知・春日丘高だ。これまで、様々なメディアで特集され、1月の試合のテレビ中継でも、何度も紹介されていたため、「存じの方も多いたろう。あの笑顔の素敵な双子のエースが、今春筑波大学を卒業する。

実は本紙でも、彼らが入学した直後に特集を組んでいた。高校時代から高校日本代表にも選ばれ、鳴り物入りで入学してきた2人。大学4年間も、匡克選手がセブンス日本代表に、圭克選手がジュニア・ジャパンに、それぞれ選出されている。また、今年度筑波大も国立大初の大学選手権優勝と、充実した4年間を過ごしてきた。大学4年間の一番の思い出として、匡克選手は「国立競技場で試合ができたこと」を挙げた。国立は芝の状態も良いし、観客もたくさん来てくれたので、楽しかった」と話す。一方、圭克選手は「2年生の時、接戦の試合で勝

ちきることができなかった悔しさ」を挙げた。確かに、2年前の対抗戦では接戦の試合で勝ちきれず、大学選手権1回戦も僅差で敗れていた。しかし、今年度は内田主将が以前話していたように「接戦に持ち込んで勝つことを目標に、準備勝を勝ち取る」ことができたと言っている。数々の輝かしい成績もあり、二人は卒業後もラグビーを続けることが決まっている。4月からはトヨタ自動車のラグビー部に所属し、社員として選手として活躍する。その他多くの社会人チームからオファーが来ていたようだが、トヨタの拠点が出身地、愛知県にあることが、決め手となったようだ。匡克選手は「欲を言えば、1年目から試合に出たい」、圭克選手は「早くチームに慣れるように」とそれぞれ目標を語った。

二人の他にも今年は多くの卒業生がトップリーグに所属するチームへの入部が決まっており、タレント揃いの近年のラグビー部を物語っている。反面、筑波大にとっては来年から苦しいチーム事情になりはしないか。しかし、「後輩たちは俺らが抜けても大丈夫。来年はきっと優勝してくれる」と内田主将、匡克選手、圭克選手は口揃えて言う。確かに日本代表の経験があるS日内田啓介選手をはじめ力のある在校生がいるし、春に入学するルーキー達もかなりの逸材揃いだ。

ラグビーを始めたときからずっと同じチームでプレーする2人だが、「二人でいることに違和感はない」「匡克選手と話す。今も二人で暮らしている彼らはお互いを「頼りになる」と評している。お話を伺っている、とても仲良しな二人の雰囲気は印象的だった。卒業後も2人仲良く活躍してくれることだろう。

大室選手が陸上という競技に興味をもったのは小学4年の頃だった。「シドニーオリンピックの100m走を見てかっこいいな」と大室選手。中学生になり、陸上部に入部。しかし、小学生のころはいつも一番だったが、中学の大会で初めて敗北を経験。先輩がハードル競技で全国大会に出場していることもあり、大室選手はそこでハードルの道をもっとと決めたという。その後はハードルの記録がメキメキと伸びていき、今までハードル「筋で頑張り、高校時代はインターハイ優勝を果たし、その後本学へ入学。本学へはアテネオリンピックでハードルの日本代表として出場した谷川聡先生を慕って入学したという。一年生の頃から多くの大会に出場し、2年でインカレ優勝を果たす。「この頃から世界を意識するようになった」と語る大室選手。大学の折り返し地点と言われる2年生で早くも世界を視野に大室選手は努力をしていた。しかし、3年では記録が思うように伸びず、プラン



ラグビー部
彦坂圭克 選手(左) 彦坂匡克 選手(右)



陸上競技部
大室秀樹 選手

Off Season特集

みんな、オフってなにしてるの??

2回目の今回はカヌークラブです。冬季最後の特集となります。

今回紹介するのはカヌークラブのオフシーズンの活動だ。昨年はインカレで団体準優勝、個人でも多数入賞と大活躍の一年だった。インカレが終わると大きな大会もひと段落となり、春までオフとなる。そんな彼らのオフシーズンの活動を取材した。

今回お話を伺ったのは、田端薫選手(体育3年、兵庫・芦屋国際中等教育)。まずオフシーズンは現在の、どのような活動をしているかを伺った。「秋にインカレが終わると翌年の春まで大きな大会はないので、実践的な練習が中心。内容も一人一人に任せてマイペースにやっている。体力づくりと言っても内容は多彩だ。ランニングや水泳、さらに卓球をしたこともあるという。その他にも新しいトレーニング方法を考案中とのこと。このことについて田端選手は「同じような練習ではマンネリになるので、変わった練習を取り入れることで、単調にならないように工夫している。また週1回のミーティングでは互いに練習の確認も行っている」と、練習に対する工夫を語った。

また、カヌーを漕ぐためにはウエイトトレーニングも欠かせない。カヌーを漕ぐ際には重要な筋肉は普通のトレーニングでは鍛えられない特別な



室内練習はウエイトトレーニングが中心となるが、カヌーに乗ることを意識する練習も必要になる。そこで、写真下にある機械の出番だ。この機械は実際にカヌー上でオールを漕ぐことが出来る代物だ。またフォームチェックだけでなく負荷もかけられるため、ウエイトトレーニングに比べて、現在破損しているとのこと、残念ながらフォームのチェック程度しかできないとのこと。しかし以前は頻繁に使用し、トレーニングに大いに役立っていたという。

室内のトレーニングだけでなく、屋外で実践的な練習をすることも毎週欠かさない。毎週霞ヶ浦に出かけ、実際にカヌーに乗り実践感覚を忘れないように努めている。「夏はシーズンなので量より質を重視する。逆にオフは量を多くして体力を付けたら、フォームをチェックしたりできることで、シーズンに戦う土台作りをしている」と田端選手。今はシーズンに

〈お知らせ〉

次号は、新入生歓迎号となりますので、Off Season特集は休載とさせていただきます。



(湯地達)

全日本教育系学生バドミントン選手権大会 男子ダブルス 女子シングルス 優勝



写真提供:バドミントン部

昨年の12月20日から23日にかけて開催された、全日本教育系学生バドミントン選手権大会にて、筑波大学バドミントン部が男子ダブルス、女子シングルスで優勝を果たした。他にも多くの選手が上位を占め、本学の活躍が目立った大会となった。今回は、男子ダブルスで優勝した佐久間浩平選手(体育3年、宮崎・北海道・札幌第1高)、定宗隆一郎選手(体育3年、宮崎・日章学園高)と女子シングルスで優勝した奥幸那選手(体育1年、岐阜・県立岐阜商業高)の三人の選手にお話を伺った。

この大会は教育系学生の全国大会である。それ故、普段の大会に比べ、参加校も約20校と少なかった。しかし、全国大会で何人も本学の選手が上位入賞を果たしたのは見事である。主将でもある佐久間選手は、昨年の春に手術をしたため、他の選手に比べ、準備期間

が短かった。「そのような点で不安やプレッシャーはあったが、優勝できて嬉しい」と率直な気持ちをきかせてくれた。

では、今大会の満足度を伺ってみると、佐久間選手、奥選手が「50%」、定宗選手が「40%」とのことだった。もともと高い数字を予想していただけに、これには少し驚いた。理由を尋ねてみると、「ダブルスでは優勝できたが、シングルスではベスト8で敗退してしまった。なので、満足度は低め」と定宗選手。他の二選手も同様の理由だった。低めに答えた数字は決して謙虚さの表れではなく、選手らのストイックさの表れのようにだ。

奥選手はまだ1年生でありながら、見事な結果を残した。「この大会では自分のやるべきことをやるだけだった」という奥選手。本学に入学してからのことを尋ねてみると、「練習も厳しい上に、環境も変わり、とにかく慣れることが大変だった」とこの年間を振り返った。

他の部員から見ても、この三選手はどのくらい活躍しているのか。三選手(体育3年、茨城・茗溪学園高)は、「三人とも上手い。これからのバドミントン部を引っ張ってもらえれば」と語った。

インカレでは、男子団体ベスト8、女子団体ベスト16と、思うように結果が振るわなかった。そして今大会は4年生が引退し、新たに3年生中心となつてから挑んだ初めての大会だ。「新体制になつてから、このような結果を残すことができて良かった」と定宗選手。今年度の大会はこれが最後であり、4月からは新たに春季リーグが始まる。新年度からの試合にも、この結果を弾みとして臨んでほしい。

(三浦加奈絵)



【結果一覧】

男子ダブルス
優勝 佐久間浩平
準優勝 奥幸那
第3位 漆崎真子
(体育2年、兵庫・伊丹北高)

女子ダブルス
準優勝 奥幸那
優勝 井上亜沙美
(体育1年、熊本・八代白百合学園高)

女子シングルス
優勝 奥幸那
準優勝 井上亜沙美
(体育1年、熊本・八代白百合学園高)

第3位 漆崎真子
(体育2年、兵庫・伊丹北高)

佐藤楓
(体育3年、青森・青森山田高)

準優勝 奥幸那
漆崎真子

Pick up Player

体育会系部活動での「体育専門学群」通称「体育専」の活躍はとも素晴らしいものである。しかし、そのような「体育専」に囲まれた部活動の中で結果を残し続けている他学群生もいることを知って頂きたい。そこで、今回尾崎選手が陸上競技部、尾崎選手(雲術2年、神奈川県・多摩高)をその一例として紹介する。

尾崎選手が陸上競技部に入ったのは中学2年生の頃だという。走る事が得意だったが、その中学校に陸上部が無く、



陸上部 尾崎拓磨 選手

先生や友達と協力し陸上同好会を作り上げたという。高校は陸上の強い多摩高校へと入学。陸上中心の生活を送っていた。そのような高校生活を送りつつ、陸上部の活動の他に週で自分の大好きな絵を描くため、美術部にも通っていたという。

高校の先輩が入っていたことで大学入学後はすぐに陸上部に入部。陸上部の雰囲気について聞いてみると、「部員200人という中での緊張感もあるが、仲間とはフランクに関われるし、競技レベル

も高いので刺激を受ける。練習は和気あいあい行っている」と笑顔で話してくれた。しかし、部活内で多くを占めるのは体育専生である。また芸専生は部活内で尾崎選手一人という中で苦労もあるようだ。

「授業での課題などが多く、その中で早起きして練習に行くのは大変。また、部活のスケジュールが体育専に合せて作られているので、授業と練習が被っている時がある」。

陸上部の練習の無い日は何をしているのか、お聞きしたところ「二日丸々空く日が無い」と苦笑交じりに答えた尾崎選手。とても忙しい毎日を送っているようだ。一ヶ月半あった夏季休業中もオフの日は4日間ほどしかなかった。忙しい毎日を送っている尾崎選手について、大変じゃないですか、とお聞きしてしまつた。しかし、尾崎選手は笑顔で「陸上と絵を描くこと、お互いがお互いの息抜きになっている」と答えた。陸

上も芸専の課題も大変なことが多いが、どちらの活動も心から楽しんで取り組んでいる事がひしひしと伝わってきた。また、「時々陸上部の広報関連で絵を描くことがある」という。陸上部に関する広報に是非とも注目したい。

文武両道で忙しい毎日を駆け抜ける尾崎選手。最後に陸上(長距離)の魅力をお聞きすると、「距離が長くてもいいけれど、周りも一緒に頑張っていると、自分も頑張れる。うわべだけの絆ではなく、大変だからこそ深い絆が出来る」ところが魅力」と、話してくれた。尾崎選手は来年度関東インカレ第91回関東学生陸上競技対校選手権大会のハーフマラソンに出場する。尾崎選手の活躍が今から楽しみである。

体育専の活躍は勿論だが、尾崎選手のような他学群生の活躍にも是非注目して頂きたい。

(小峰朱理菜)

サッカー日本代表によるW杯アジア予選の活躍や、なでしこジャパンがロンドン五輪で銀メダルを獲得するなど、今、日本でサッカー競技が盛り上がりつつある。試合の様子はテレビでも放送され、日本代表の活躍に国民が大きな関心を寄せている。120人以上の部員が所属している筑波大学の蹴球部も毎年、Jリーグを輩出しており、昨今のサッカーブームの翼を担っているといえるだろう。

仲井健人選手(心理1年、大阪・岸和田高)は蹴球部に所属する部員の一人だ。毎日の練習に励んでいる姿は、

他の部員と何も変わらないが、実は、仲井選手は耳に先天性の障害を抱えている。生活する上で補聴器をつけているが、周囲の雑音で会話の聞き取りにくいことも多々あり、健聴者と話す場合、筆談を必要とする場面も多々あるようだ。

仲井選手は昨年の7月に開催された、世界ろう者サッカー選手権大会の日本代表に選出された。国際大会への参加はこれが初めて。「自分が代表として出場してもいいのだろうか。世界と戦えるか不安だった」と、仲井選手。実際に戦つてみて、世界と自

分の実力の差を痛感した。結果はベスト8。目指していた結果には届かなかったが、とても大きな経験となった。更に練習に励めば、次は対等に戦えるのではないかと、という手ごたえも感じたそう。出場前は不安だらけだったが仲井選手だが、「次は世界の頂点を取ろう。そのために成長していこう」と大会終了後、チームメイトと語り合った。

しかし、ろう者スポーツに対する知名度は低い。7歳の時に父の影響でサッカーを始めた仲井選手だが、自身がろう者サッカーの存在を知ったのは高校入学後のことだった。知名度が低い故に、スポンサーが付かず、金銭的に苦しい状況の選手も少なくないという。今回、日本代表として打診されたにもかかわらず、このような理由で辞退した選手もいる。国内において、ろう者スポーツをサポートする体制はまだ整っていないようだ。

今年、ろう者スポーツのオリンピックであるデフリンピックが開催される。仲井選手



蹴球部 仲井健人 選手

の目標は、デフリンピック日本代表として、頂点を取ることだ。そして、「大学卒業後は就職し、聴覚障害者が少しでも働きやすい環境を築いていきたい。次の世代が楽になるようにと働きかけたい」という将来の夢を語ってくれた。

仲井選手は、2月上旬に行われた日本代表候補者合宿に招集された。ここでしっかりアピールしていきたい」と、合宿前に語ってくれた。デフリンピック出場という夢に、一歩ずつ近づいている。

健聴者がろう者について知る機会が少ない上に、障害者スポーツは世間あまり馴染みがない。ろう者サッカーという競技があること、そしてデフリンピックが今年開催されることを知っている人は、ほとんどいないだろう。しかし、筑波大学の選手が世界で活躍することは、ろう者のことを知る良い機会になる。その架け橋になつてくれる仲井選手を、今後も応援していきたい。

(三浦加奈絵)

次号予告

新入生歓迎号!

体育会サークルガイド掲載予定

新歓祭にて配布予定

サークルPR掲載希望も受け付けています!

男子バレーボール部



インカ 優勝

7年ぶり!!

寒さも和らぎつつある2月、少々時間が経ってしまったが昨年12月に全日本インカレで見事日本となった男子バレーボール部に取材を行った。インカレに迎えてくれたのは徳永圭選手(体育3年・岡山・金光学園)、出未田敬選手(体育3年・北海道・札幌第二)、久原大輝選手(体育3年・兵庫・市立尼崎)、前田誠選手(体育3年・長崎・佐世保南)の4人である。前回の取材は秋季リーグ準優勝直後、その際に今後の目標として全カレ優勝を宣言したが、見事その通りの結果を持ち帰ってくれた。

まずは単刀直入に、全カレ優勝の感想をお聞きした。徳永選手「コンビの正確性の追及、ミス減らすなど、秋季リーグで見つけた課題に取り組んだ結果が出た」

久原選手「やっとここまで来られた、という思い。大学入学時から日本になりたいと思っていたので、それが達成できた。この結果に満足せず、今年も勝てていきたい」

出未田選手「今まで日本にならなかった経験がなかったのが嬉しい。全カレは集大成の大会なので、その1年の取り組みが結果として現れる。そういう大会で、チームとして結果を残せたのでよかった」

前田選手「皆が言った通り。チームの目標だった全カレ優勝が達成できてよかった」

4人は現在3年生だが、入学して初めての日本の感想を晴れ晴れとした表情で語ってくれた。そして次に、それぞれが思う全日本インカレ MVP 選手をお聞きした。

徳永選手「全員！強いて言うなら阿部選手(体育3年・福岡・八幡)。チームを影で支えていた」

久原選手「試合に出ていないメンバー。コートの中の選手がプレーしやすい状況を作ってくれた。彼らの思いも



背負って自分たちは試合に出て、結果を出せた。結束力の強さを証明できたと思う」

出未田選手「この大会で引退した4年生。チームとは最上級生である4年生が作り上げるものなので、その働きがあったからこそこの結果だと思う」

前田選手「キャプテンの矢野選手(体育4年・北海道・とわの森三愛)。日本体育大学戦で途中出場し、チームを逆転勝ちに導いたから」

コートに出ている選手だけでなく、緑の下の方持ちとしてチームを支えている選手も、体となって掴み取った結果だということがよくわかる答えをいただくことができた。

最後に、現在の目標と、バレー部として発信したいことは何かを伺った。個人の目標はそれぞれ体重を落とすこと(徳永選手)、ジャンプ力をつけること(久原選手)、コートに立ち続けること(出未田選手)、バレーボールに限らず本をたくさん読むこと(前田選手)であった。昨年、全カレは優勝だったものの、春・秋季リーグは2位という結果。今年はリーグ戦も全カレも優勝し、4冠を目指して一人ひとりが挑戦していくことがチームの目標であると宣言してくれた。また、練習見学は自由なので、ぜひ頑張っている姿を見に来て、バレーに興味を持ってほしい、というメッセージもいただいた。前回の目標を見事に有言実行してくれたので、今回も期待したいと思う。

(武藤菜摘)

試合結果

第65回秩父宮賜杯
全日本バレーボール大学
男子選手権大会試合結果

筑波大学2
(25・4・25・17)

筑波大学2
(25・19・25・17)

筑波大学3
(25・21・22・25)

筑波大学3
(25・21・25・22)

筑波大学3
(26・24・20・25)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

筑波大学3
(25・21・25・17)

編集後記

今号から編集長を務めることとなりました、小峰朱理菜です。これから二年間よろしくお願ひ致します。

とうとう卒業の季節となりました。大学構内を走っていると時折春の気配を感じます。春が来た、と嬉しくなる反面、今までお世話になっていた先輩方が大学を去ってしまうと思うと、とても不安で悲しいばかりです。筑波大学を支え、盛り上げてきた先輩方が去ってしまうことはとても悲しい気持ちですが、それをバネに私たちが在学生が大学を引っ張っていく強い「先輩」となれるように頑張っていきたいです。

今号から編集長となり、新しい仕事内容を覚えるのに必死で、何かと見苦しい部分があるかと思いますが、筑波スポーツ編集部同、さらに素晴らしい新聞を作成できるよう努力してまいりますので、何卒よろしくお願ひ致します。

次号は新入生歓迎号となります。新入生の素敵な大学生活をお手伝いできるような新聞にしていきたいと思っております。次号もよろしくお願ひ致します。

編集長
小峰朱理菜(人文2年)

副編集長・会計
三浦加奈絵(比文2年)

主務
中矢 圭(知識1年)

広報
武藤菜摘(比文1年)

編集スタッフ
大庭夏海(人文3年)

湯地 遼(人文3年)

矢畑牙佳(人文3年)

発行所/筑波大学体育会
(TEL.029-853-2589)
発行人/綿谷 桂太
編集/筑波スポーツ編集部
tsukusupo@hotmail.co.jp
責任者/小峰朱理菜(編集長)